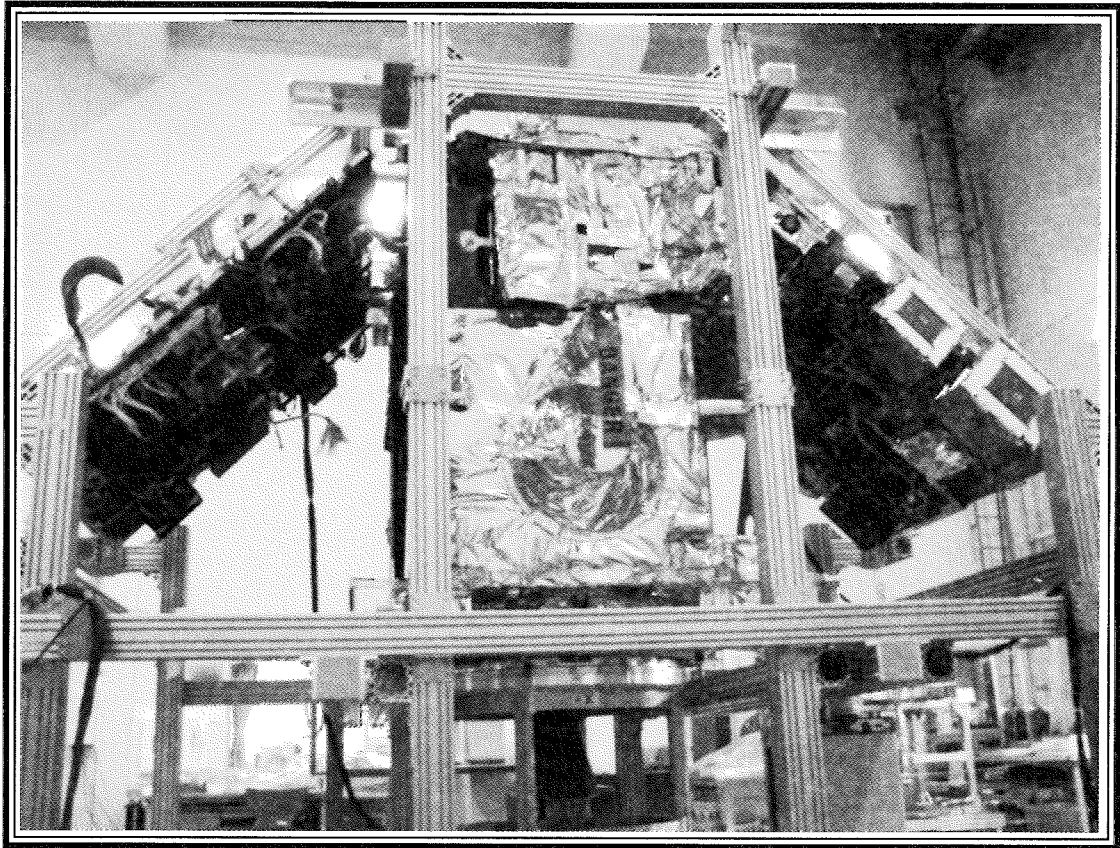


あるむぜお91

府中市郷土の森博物館だより

al museo NO. 91

2010年3月20日



打ち上げのため種子島への輸送を控え、調整中の金星探査機「あかつき」
パネルを左右にはね上げた様子（左側には雷・大気光カメラ、右側には4つのカメラが見える）
©JAXA/ISAS

目次

- 1-2 シリーズ 世界天文年
 - ④世界天文年終了 そして天体観測新時代へ
- 3 展示会案内
 - 特別展 お稲荷さんの世界
- 4-5 ノート古代国府びとの食を探る
- 6 坂本長利「土佐源氏」資料の世界 ④
- 7 最近の発掘調査
 - 中世区画遺構群の建物集中部を発見！
- 8 小説 探鳥物語 ④ 未来の目視者たち



1609年、ガリレオ・ガリレイが人類初の望遠鏡による天体観測を行ってから今年で400年。それを記念して2009年は全世界を通じて「世界天文年」と定められています。当館でも関連の天文イベントがいくつか予定されているとともに、本紙の表紙シリーズでまつわる話を連載していきます。

④世界天文年終了 そして天体観測新時代へ

2009年12月、世界天文年に伴う世界各国の様々な取り組みが終わりました。そして、さらなる飛躍を目指し、星や宇宙を調べる観測の目は、新たなステージに向けて着々と準備が進められているようです。

天文観測に関わる日本国内の施設や機関は、大学や公共天文台を加えると、数十か所に及びます。その中心に構えるのは、宇宙航空研究開発機構（JAXA）と、自然科学機構国立天文台（NAOJ）です。JAXAでは宇宙に望遠鏡を打ち上げたり、小惑星や惑星に探査機を送り込んで直接の調査を行います。国立天文台では地上の施設を中心に宇宙をあらゆる角度から観測しています。では具体的に、どのような方法で宇宙を調べているのでしょうか？

ガリレオは望遠鏡を宇宙に向け、肉眼では見ることはできなかった宇宙の様子を捉えました。この成功によって、長期間に亘り、目で見える光（可視光）で宇宙を理解すべく努力を続けてきたのでした。しかし実際には可視光を利用した観測だけでは、暗黒星雲やブラックホール、さらに遠方の宇宙の様子は明らかになりません。目に見えない電波や赤外線、X線などの光を使うことで、初めて未知の領域に迫ることが可能となるのです。ところが、これらの光には、地球の大気にはばまれ、地上で観測することができないものもあります。そこで、望遠鏡自体を宇宙まで打ち上げ、大気のない空間からも、様々な天体を観測するという発想が生まれたのです。

国立天文台では、宇宙の彼方に輝くわずかな光を捉えるために、様々な観測技術が開発され、新たな星の発見等で実績を重ねています。たとえば、前回紹介したすばる望遠鏡は、8.2mもの大きな口径と大気の揺らぎを補正する補償光学な

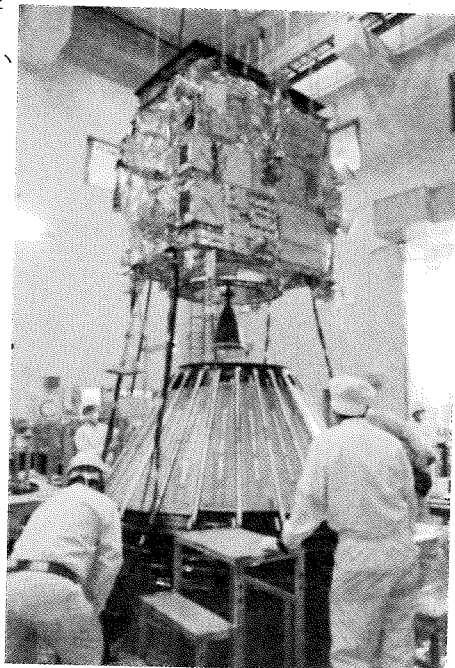
どの技術によって、遠距離の銀河や太陽系以外の惑星系の発見等、さまざまな成果をあげてきました。太陽系外縁の天体から遥か遠くの銀河まで、今まで知り得なかった未知の宇宙地図の輪郭が、おぼろげながらも見えてくる形となってきています。とは言え、まだまだすばる望遠鏡をもってしても解明困難な謎が多く出現しています。新たな疑問を解消するために、国立天文台では直径30mと言う、さらに巨大な望遠鏡の建設に向けて、世界の天文学者と検討を重ねているところです。

一方で各国協力の下、南米チリのアタカマ砂漠に、移動可能な直径7mと12mのパラボライプ電波望遠鏡を66台以上設置するための建設が進んでいます。すべて完成すれば、ハッブル望遠鏡の10倍に及ぶ高解像度のデータ収集が可能になります。現状では観測不能距離にある、誕生直後の銀河等が見られるのではと期待されています。

一方で各国協力の下、南米チリのアタカマ砂漠に、移動可能な直径7mと12mのパラボライプ電波望遠鏡を66台以上設置するための建設が進んでいます。すべて完成すれば、ハッブル望遠鏡の10倍に及ぶ高解像度のデータ収集が可能になります。現状では観測不能距離にある、誕生直後の銀河等が見られるのではと期待されています。

JAXAは、色々な科学観測衛星の計画を進めています。写真は、初夏の打上げが予定されている金星探査機「あかつき」をロケットの先端部分に取り付けるための試験の様子です。「あかつき」は、地球以外の惑星の気象を気象衛星の方法で調査する世界初の探査機です。5つのカメラによって、大気上層から地上まで、金星の様子を詳しく調べることができます。特に、秒速350kmもの高速の風“スーパーローテーション”の解明に注目が集まっています。あかつき打上げ直後には、小惑星探査機「はやぶさ」の帰還、2年後に打上げ予定の水星探査機や「はやぶさ」に次ぐ小惑星サンプルリターン、天文電波衛星など、ワクワクするような計画が後を絶ちません。世界天文年を節目として、新たな宇宙への扉が開かれようとしているのです。

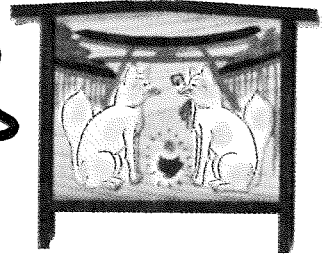
（本間隆幸）



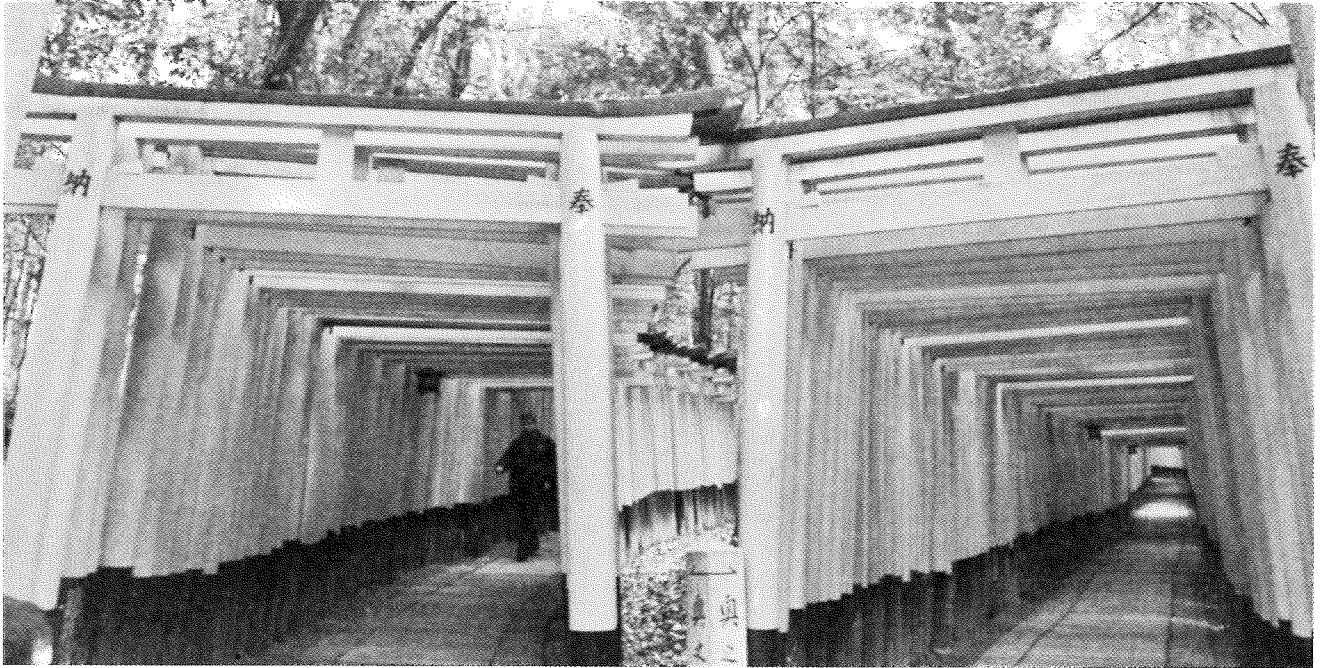
展示会案内

特別展 お稲荷さんの世界

5/1 (土) ~ 6/27 (日)



府中市内の稲荷絵馬



京都府 伏見稲荷大社千本鳥居

朱い鳥居や白い狐をシンボルに、日本全国に3万以上分布するといわれるお稲荷さん。神様、仏様のみならず、土地、食べ物の名前としても知られ親しまれています。

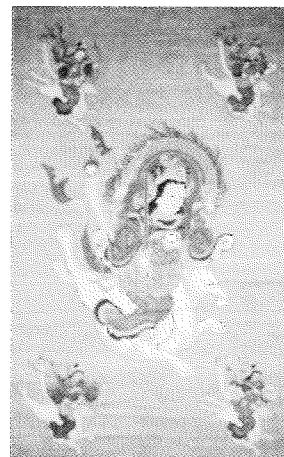
総本宮の京都・伏見稲荷大社をはじめ、日本三大稲荷、五大稲荷など（どの稲荷が相当するかは諸説あります）、有名なものから家々にまつられる祠まで、その姿はさまざまです。近世には江戸近辺でも大流行し、府中市内にも400以上のお稲荷さんがまつられています。

仏教と集合しダキニテンと呼ばれたり、狐に乗った女神、稲を背負った翁、ときには狐そのものが稲荷と呼ばれたり、五穀豊穰、商売繁盛、防火、場所によっては宝くじ当選、大漁満足など、さまざまなご利益を持つことでも知られています。府中市内では2月の初午の日を中心に「正一位稲荷大明神」と書いた幟を立て、油揚げや目刺をお供えするなどのおまつりが今でも行われています。

今回の展示では、お稲荷さんとは何か？その起源と歴史をさぐり、お札や狐像など100以上の全国各地のお稲荷さんにまつわる資料から、全国的な広まりや多様な姿をながめるとともに、府中市内における代表的なお稲荷さんを紹介します。

身近なようで意外と知られていないお稲荷さんの世界へ足を踏み入れてみませんか？

(佐藤智敬)



ダキニテン曼荼羅 (個人蔵)



岩手県 志和古稲荷神社発行 稲荷像札

府中には、古代武蔵国府に關係する遺跡が広範囲に埋もれていて、その密度も高いことが知られています。1975年以來、継続的に行われている発掘調査は、1,400か所を超え、さまざまな遺構が数多く検出されています。とりわけ庶民の居住施設でもある「竪穴建物跡」は、これまでに4,600棟以上を検出していて、一時期に1,000人を越す人びとが集まり住んでいたと試算されています。

しかし残念なことに、これほど多くの発掘調査を行い、さまざまな遺構を検出しているにもかかわらず、当時の人びとの食生活については、良好な発掘資料に恵まれていません。むしろこれは、武蔵国府の遺跡に限ったことではなく、よほど恵まれた環境下でない限り、食物そのものが腐らずに発掘されることは少ないのです。

でもそれだけに、「古代の人々が何を食べていたのか」は、とても魅力的です。小文では、この魅力的なテーマに関する現在までの知見を紹介してみようと思います。

▼ どんなモノが発掘されているか

まずは、武蔵国府跡で確認された食材に関わる出土品を列記してみます。コメ・ムギ・アワの穀類、ヒエ、モモ・ウメ・ウリの種子、クリ・クルミといった堅果類の表皮、貝殻など。また、「米」「氷」「酒」と書かれた土器も出土しています。投網などの魚網に付けられた錘がまとまって出土することもありますので、多摩川など近辺の川で漁を行っていたことも確実です。こうしてみると、思いのほか多彩に感じます。

しかし、こうした遺物はきわめて僅かです。穀物や種子、堅果類の表皮、貝殻は、幸運にも、今日まで残り、そして発掘現場で調査者の目に留まったものといつてよいでしょう。

その意味で、こうしたモノが今後、飛躍的に増加することは考えにくいのです。

▼ カマドの土を洗う

さて、こうした状況下において、最近になって興味深い調査方法が少しずつ、採用されるようになってきました。竪穴建物に造り付けられたカマドの土を発掘現場から採取して、これを水で洗うのです。カマドはいうまでもなく調理施設ですから、その周囲の土にはそこで利用された植物の種子（植物遺体）や動物の骨（動物遺体）が燃え尽きないまま残っていることが多いのです。むしろ、そうした遺体は微細で、土と混じっていますので、なかなか見つけ出すことができないのですが、土を乾燥させ、それを水の中に入れて、水面に浮いたり沈んだりした遺体をフルイによって回収するのです。この方法をフローテーションと呼びます。

府中では、東京都埋蔵文化財センターが実施した、宮町1丁目の調査で採り入れられ、発掘された7世紀から10世紀の竪穴建物のうち、6棟のカマドの土を洗い、表1に示した結果が得られています。

遺構番号	木本		草木										炭化材	不明	遺構の年代	
	● モモ	サンシヨウ属	● イネ	● アワ・ヒエ・キビ	● コムギ	イネ科	ホタルイ科	タテ属	● マメ類	マメ科	エノキグサ	スミレ科				シソ科
	核	核	胚乳	胚乳	胚乳	胚乳	果実	果実	種子	種子	種子	種子	果実			
N51-SI257			9												2	7世紀
N51-SI243		1	9	1					3						18	8世紀
N41-SI170			99	58		1		6	3	4		1		1	15	9世紀
N51-SI244			33	3	1			1		1				4	5	9世紀
N51-SI251	1		10	2	1					4					12	9世紀
N51-SI253			20	1	1				3	1	2			3	34	10世紀

表1 竪穴建物のカマドから検出された種実の同定結果（●：栽培植物）

イネが多くの竪穴建物でコンスタントに検出され、意外にも、当時の庶民がコメを口にしていたことがうかがえます。アフ-ヒエ-キビの可能性のある雑穀もかなりの数にのぼります。また、数は多くありませんが、マメ類も複数の竪穴建物で検出されています。従来の知見をうわまわる豊かさといってよさそうです。

▼ 古代の府中でタイを食べていた

宮町1丁目の調査では、上に掲げた植物遺体ばかりでなく、驚くべきことに、タイやスズキといった骨も見つかりました(写真・表2)。N51-SI244と名付けられた、9世紀の竪穴建物跡での検出です。こんな小さな骨の残骸から、よく魚の種類までわかるものだと、素人の私などは感心するばかりですが、タイ科の一種と同定された腹鰭の棘片はその大きさから体長40cmくらいの個体で、マダイの可能性が高いといえます。骨はいずれも焼けていることから、食用後カマドに捨てたのでしょうか。

さて、ここで注目されるのは、タイやスズキが海の魚だということです。府中から最も近い東京湾でも、直線距離で25km。比較的平坦な道のりとはいえ、時速5kmとして4時間ですから、それなりの距離といってよいでしょう。むしろ、採れたてがその日のうちに食卓にのぼった可能性もありますが、干物などに加工したうえで運ば

てきたのかもしれませんが。いずれにしても、海産物をも含む、バラエティ豊かな食生活を復元してよいでしょう。

そしてまた、海魚の消費は国府を中心とした流通ネットワークの存在をもうかがわせてくれます。国府にはマチの機能を支えるマーケットも存在したことが想定できますし、実際「市」の文字が書かれた土器も出土していますから、マーケットを介して海産物を入手したのでしょう。また、行商のような交易を想像することもできます。

▼ フローテーションへの期待

フローテーションという方法の強みは、竪穴建物のカマドという、当時の庶民の生活の場に残されていた遺体を見つけ出すことにあります。1cmに満たない小さな遺物が、国府びとのくらしを見事に描き出してくれるのです。

ただ残念なことに、このフローテーションの実施は、国府はもちろん、それ以外の地域でもまだ僅かです。実施事例が増えればさらに豊かな情報もたらされることは間違いありません。また、国府以外の一般村落遺跡での実施例の増加にも期待したいところです。それによって、国府と村落における食生活の比較ができるはずです。村落に比べて国府の食生活は豊かだったのか、そんなことを考えられる日が来ることを期待して、小文を閉じたいと思います。

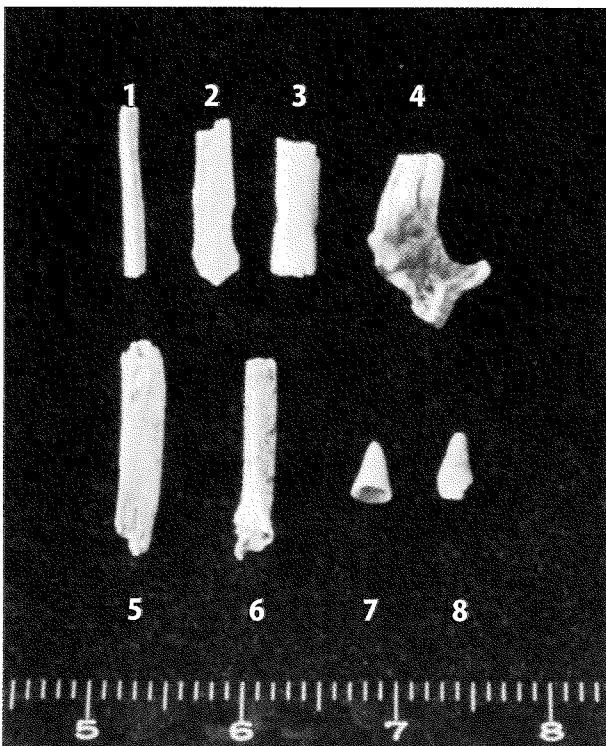


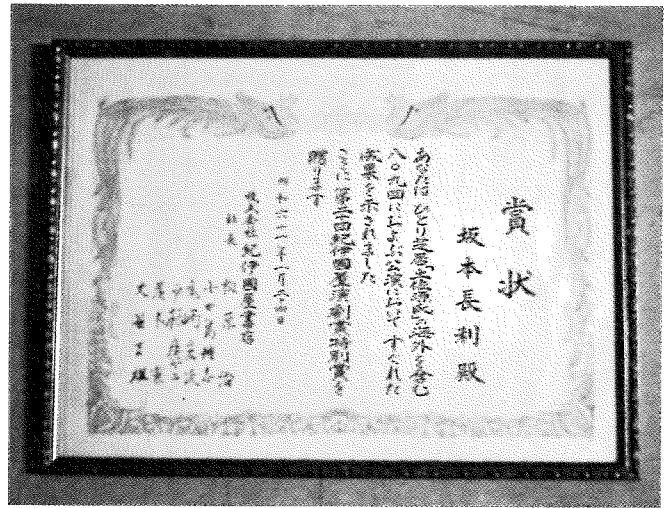
表2 竪穴建物(N51-SI244)のカマドから検出された魚骨の同定結果

種類	部位・状態	点数
スズキ目タイ科 の一種	顎骨片	1
	犬歯状歯	3
	鰭棘片	2
	腹鰭棘片	1
スズキ目	右方骨片	1
魚類	鰭棘片	3
	不明破片	7

写真 竪穴建物跡のカマドから
検出された魚の骨(約2倍)
1・2・3:魚類の鰭の棘
4:タイ科の腹鰭の棘
5・6:タイ科の鰭の棘
7・8:タイ科の歯

坂本長利 「土佐源氏」 資料の世界

④次の「土佐源氏」へ



紀伊國屋演劇賞特別賞の賞状

府中ゆかりの民俗学者・宮本常一の代表作「土佐源氏」(『忘れられた日本人』所収)。その世界にはまった俳優・坂本長利さん。40年以上にわたり「土佐源氏」を一人芝居で演じてきた坂本さんより、約2,000点の「土佐源氏」関係資料が博物館に寄贈されました。この連載では、その資料をもとにして「土佐源氏」の世界をご紹介します。

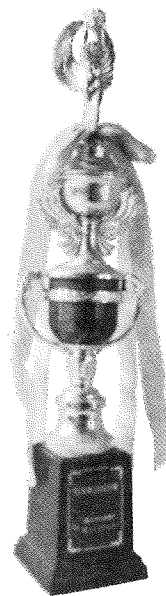
40年以上にわたる上演履歴は当然のごとく評価を受けます。単に続けることだけでなく演劇関連の評価を得、現在に至っていることを実感します。寄贈資料のなかには表彰状やトロフィーなどが含まれています。1986年(昭和61)に受賞した紀伊國屋演劇賞特別賞の賞状は、当時同時に招聘され海外公演をした演出家・蜷川幸雄の「マクベス」を抑え、それを含めた800回以上の上演に対する表彰だといいます。

その他こんな面白いものもあります。該当するその日にもっとも輝いていた人を特集して表彰するテレビ番組の企画で授与された「1976年2月10日賞」(日本テレビ系「一億人の大質問 笑ってコラえて!」内のコーナー)受賞時のトロフィーです。2002年3月に受賞の様子や坂本さんの演劇活動が日本全国に向けテレビ放送・紹介されたことで、坂本さんの「土佐源氏」は新たに注目されたようです。

このように着実な積み重ねは全国に坂本「土

佐源氏」ファンを次々つくりあげ、評価されてきました。博物館にもたらされたのはその過去の積み重ねの一部ということになります。しかしそれで「土佐源氏」の世界が完成したとはまだまだ言えません。昨年末には芝居を新たに録音したCDが発行されたり、土佐源氏の名言を記したぐい飲みが発売されたりしています。

現在、坂本さんは長年住み慣れた東京から栃木県へ居を移していますが、ことあるごとに上京、俳優活動を続け、「土佐源氏」の公演も行っています。この次の公演がいつになるのか、その結果新たにどのような「土佐源氏」関係資料が今後生まれていくのか楽しみでなりません。(佐藤智敬)



日本テレビより表彰された際のトロフィーとその台座

最近の発掘調査

中世区画遺構群の

建物集中部を発見！

本宿町一丁目

府中市文化振興課文化財係

湯瀬

禎彦



第五小学校と中世区画溝の位置

昨年3月に開業したJR南武線西府駅にしるの南には、136年の歴史を刻む市立府中第五小学校があります。同校は多摩丘陵を見晴らす八ヶ上に立ち、校庭の一角に1962年（昭和37）にできたプールがありました。昨年秋、このプールが改築のために取り壊されると、その下から今回紹介する遺跡が発見されたのです。

発見された遺跡は、約1,000基を数える柱穴をはじめ、なてこう 竪坑の下部に横穴を持つ地下式坑や、常滑焼きの陶器、カワラケと呼ばれる素焼きの土器などで、今から約800年～約400年前の中世（鎌倉・室町時代～戦国時代）のものが多くを占めます。

近年、第五小学校周辺では、西府土地区画整理事業に伴って、総面積1万㎡を超える発掘調査が実施されました。その結果、約200m四方の範囲を溝で区画し、ほったてはしらなてもの 井戸や掘立柱建物、地下式坑など、様々な施設を配置した中世の遺跡の存在が明らかになっています。

今回、第五小学校から発見された遺跡も、この区画内に展開する施設の一部と考えられますが、注目すべきは、これまでの調査で確認されていない、おびただしい数の柱穴が存在することです。この柱穴群は、規模の大きい複数棟の掘立柱建物を含むとみられるもので、区画内の主要な施設であった可能性があります。

では、この中世区画遺構群とは、どのような性格の遺跡なのでしょう。現時点では遺跡の全体像が判っていないこともあり、特定はできませんが、かつて第五小学校の東で、鎌倉・室町時代の御家人であった津戸氏と同姓の人物を供養した板碑が出土し、みろくじ 弥勒寺と呼ばれた寺院の存在をうかがわせる遺跡が発見されています。さらに、第五小学校付近には、ほんしゆく 本宿旧家の故地で、元屋敷と言われる場所があったとの伝承もあります。こうした情報も踏まえると、溝で区画された領域には、武士の屋敷や寺院、または村落の拠点となる施設が、中世を通して複合的に置かれていたのかも知れません。

第五小学校の周辺には、まだ多くの遺跡が眠っていると考えられます。今後の発掘調査の進展によって、中世区画遺構群の実態が一層明らかになることを期待しましょう。



発見された柱穴群

約1,000基もの柱穴が密集して見つかりました。掘立柱建物が何度も建てられたことを物語ります。

「あっ先生、トビが旋回してますよ」奈津子が上空へ向けた人差し指の先に、明らかにそれとわかる飛翔形がシルエットで確認できた。早朝の多摩川中流(関戸橋付近)で今日も熱心に野鳥の姿を追う4人の中学生…真剣この上ない8つの瞳が四方八方にアンテナを張って、動く標的を追っている。

「あの～自分、結構この辺の多摩川で観察しますけど、あの鳥は時々飛んでいるのを見かけます。でも似たような大きな鳥がいくつか飛んでいるようにも思えるんですが…」綱川がいつものゆっくりペースで呟いた。満面の笑みを浮かべて当馬が答える。「いやあ綱川君の観察眼には毎度感心するねえ、似たようになってどこが違うとを感じるの?」「ハイ、大きさはそんなに変わりませんが、飛んでる形とか…そうだ羽根だ…尾羽が違うような…何だろう?」「いい所まで来たよ綱



2008年に府中市四谷に出現した外来鳥

川君、トビの尾羽は真ん中がちょっと凹んでいるんだ。飛んでいると丁度三角に見えるかもね。似た鳥は扇状じゃなかったかい?」「そうです、そうです!さすが先生だ」綱川が笑顔で答える。「ここらの多摩川で観察できるワシ・タカの仲間はトビの他ではノスリ・チョウゲンボウ・オオタカなどが確認されているんだ。これらは全て円尾になっているからトビとは異なって見えたんだよ」すかさず怜が得意のパソコン画面を覗きつつ発言する。「府中市域の過去25年の調査データでは、オオワシの多摩川上空通過もあったみたいね」「そうだよ、多摩川は留鳥も豊富だが、夏鳥・冬鳥などの渡り鳥、そして猛禽類も飛来する絶好の環境なんだ。この前も話したけど人の手が絶えず入る場所でもあるから、この間のカモみたいに減ったりする鳥も目立っているがね…綱川君、ほらいつか君はカラスに餌を与えてみんなに非難を浴びたことがあったね。見てごらん、あそこにもハシブトガラスの姿が…河原でも奴らは我が者顔で威張った風さ。本来はワシやタカの方がカラスよりは強いはずなんだけど、今では結構いい勝負で、下手するとカラスの方が上かも知れないぞ」世衣子が真面目な顔で横から、「そうよ、前にもオオタカの幼鳥がカラスに追われているところを見たわ。何か本来の生態系がおかしくなっていくみたい…」

突然、当馬の携帯が鳴った。「うん、どうしたって?…へえ～何だろう…今関戸にいるから、これから行くか?探鳥団も連れてね、ハイハイわかった」「どうしたんですか先生、ちょっと目がギラついてますよ」奈津子は興味深々の表情である。当馬が号令をかける。「四谷の方に移動するよ～!」怜と世衣子が半信半疑の

面持ちで、「何かあったんですか、先生」の問いに間髪入れず当馬の答えが「うん、行けばわかるさ。みんなビックリするぞ」

一行が関戸橋から左岸をわずかに上流に向かって進んだ先は府中市四谷、緑地や田んぼが視界に飛び込んで来る。その一角に人だかりを見つけると、メンバーは駆け足でその一点を目がけた。「何ですかあの鳥は?」奈津子の絶叫に近い声。野鳥ファン?らしきカメラマンの放列が、むしろ観察には邪魔になっている中を掻き分け、当馬がついにその姿を

捉えた。しばらくの沈黙…瞳を大きく見開いた当馬の口が動いた。「これは外来鳥だね。たぶんツキノフテリムクというアフリカの鳥かな?帰ったら図鑑で調べて確かめよう。飼っていたものが逃げたのが、捨てられたのが…たまにこうした外来種に思いがけず遭遇するけど、あんまり喜ばしいことではないね」「あの～、外国産の野鳥も住める環境って良いことじゃないんでしょうか…」綱川らしいコメントに丁寧に答える当馬。「確かにそうかも知れないが、自然は本来あるべき姿が正常なんだ。元来いるはずのない者が混じれば、本来いる者に影響が出てしまう…ましてや人間が飼っていた外来種を放してしまったら…?」ハッと気が付いた綱川が「よくないですね…自分また勉強になりました」「いいんだよ綱川君、こうやって経験を積み重ねていくことが優秀なウォッチャーを育成していくんだから。君たちが大好きな野鳥観察で、環境の良し悪しまでわかるってことを忘れないで欲しいね…」

今後も様々な発見が探鳥団の観察記に書き込まれていくことだろう。野鳥観察を通じて足元の自然を察知する感性に磨きをかけることこそが当馬の思いである。やがて彼らが成長し、地域の自然調査に活躍する姿を想像しながら、当馬は心で復唱していた。「頑張れ、頑張れ、未来の環境ウォッチャーたち…期待してるぞ!」